

大谷は、**Babe Ruth** を超えたか？

前回、大谷の嫁の話になったが、大宅映子さんでさえ、女子アナはダメだという。2～3年はともかく、それ以上になると、徐々に崩れてきて、元からの「品」のない女性になる。その過程がわかると、その時点でダメだということがわかる。

まあ、いくら彼女らが厚顔無恥であろうとも、立候補することはないだろう、と思っている。なぜなら、日本中、さらに世界中の大谷ファンが黙っていないだろう。あちこちで、姑、小姑の眼が光っている。このプレッシャーに耐えられるのは、そういないだろう。大宅さんは、我々とは異なる次元で語ったのだろうが、一部は重なっているだろう。では、どうすればいいのか？

とにかく、「品のいい」女性に限る。一見、品がよさそうで、じつはそうではなかった、というのを大谷も最近見ていただろうから、(ボクら、見ただけでわかるのだが) 育ちもそうだが、**聡明な女性**でないといけない。これで**容姿端麗**なら申し分ない。これは大谷がどこまで許容するかだけの話である。決して、「見かけ」に惑わされないようにするべきだ。内面の底流に脈打つ、雅やかな毅然とした本質の美しい女性でないといけない。普段からの立居振舞挙措動作をみればすぐにわかることである。内面から滲み出る、聡明さと毅然たる生き方、本人でさえ、あるいは気が付いていないかもしれない、「財産」に溢れる女性はいるものである。

それはともかく、「大谷は **Babe Ruth** を超えたか？」である。むろん 100 年も前のことだから、現在とは小さなルールも異なれば、当然ながら現在ほど、野球技術が発達していたわけでもない。投手や野手のレベルも異なる。だから、同じ時代での比較なら意味があるけれども時間をおいての比較は困難であり、無意味でもある。仮に比較をするとすれば、大谷に有利な条件がある。それは、**Babe Ruth** は、白人選手としか戦っていないことである（米国の新聞記者による。）現在は、アフリカ系であろうと中南米出身であろうと、平均すれば、黒人選手の方が、レベルが高いことは間違いない。アジア系は、やや劣るかな。筋肉の長さや強さにおいては、白人よりも黒人選手の方が勝っている。（疑うなら、オリンピックの短距離走をみればわかる。）このことは、**Babe Ruth** がベンチから **Satchel Paige** の投球を見ていて、徐々に顔面蒼白になっていった、という事実、「火の玉投手」と呼ばれた **Bob Feller**（最速 158.6km、一説に現在の測定法では、175 km を超えていた）が、**Paige** の速球を見て、「僕らの投げるボールは、まるでチェンジ・アップみたいなものだ」とつぶやいたことから領ける話である。**Babe Ruth** の時代には、黒人選手はいなかった。数字は単純だから、すぐにそのまま比較してしまう可能性がある。その「前後の状況」を比較しなくなってしまう。

話をまったく変えて考えると、柔道がある。山下は、全日本で10連覇したというが、最後の1年は、明らかに負けていた。ただ、審判の先入観があって、投げられて体を崩した、と判定されなかっただけで、スローモーションで見れば、いやな言葉だが、有効とか効果とかでポイントを取られていただろう。もっとひどいのは、ヨーロッパである。重量級のある選手が、10年間負けていない、というが、一度TVでみたら、先に有効かなにかをとるとあとは逃げ回っている。この場合、積極性に欠ける、と指導があるのだが、この選手にはヨーロッパの審判も消極的とはとらない、という暗黙の了解があったようで、他の大陸の選手ならすぐにポイントを奪われる。そういう欠点があるから、時代を超えて比較するのが難しいのである。だから、このフランス人と山下と比較するのはバカげているし、ましてや木村政彦との比較に至れば、それこそ比喩物にならない。47歳になっていた木村を東京オリンピックの代表としてヘーシンクと戦わせていけば、まず、木村の勝利は、かなりの確率で可能だったに違いない。(そういう証言が多い)

野球においてもそうで、時代を超えて比較するのは、じつに困難な作業になる。

ただ、超人的なエピソードがあれば、それを基準に考えることができる。たとえば、中西太のように、遊撃手のグローブの先をかすめたボールがホームランになったとか。大谷翔平の場合、素振りの風を切るブーンという音が、相手チームのダッグアウトから聞こえた、とか。キャッチャーは、その音をすぐ傍で聴くから、ストライクのボールを投げるより申告敬遠に賛成するだろう。

今、速球は時速100Miles,変化球全盛の時代に Babe Ruth を連れてきたら、どうだろう。すぐに慣れるにしても、同じような記録が遺せたかどうかわからない。

そういう意味では、大谷翔平は、実質的には、Babe Ruth を超えた、といってもいい可能性はあるかもしれないが、逆の場合もあり得る。だから、単純な比較はもうやめようではないか。……現時点では、ボクは「同等」と考えている。

惜しむらくは、大谷の投球回数が規定に達していないことであるが、それでも9勝し、……日本でなら「記録のために」無理やりにでも登板させていだらう。このあたり、MLBのマドン監督は、大谷の将来をみつめて、登板を回避させた。英断だ。……このあたり、監督は、シーズン終盤、大谷が事実上 Babe Ruth を超えた、と考えていた節がある。

ただ、明らかに大谷の方が上だという証拠がある。「盗塁」である。これは、体つきをみても明らかだが、大谷の「判定勝ち」だろう。大谷が、ホームラン60本を超えたとき、初めて Babe Ruth を超えたと判断してもいいかも知れないが。

2022.02.02.

